

ISSN 2433-345X

言語文化研究 徳島大学総合科学部  
第二十九卷 別刷 二〇二一年十二月

『本院侍従集』 続考  
―兼通の描かれ方―

堤 和 博



## 『本院侍従集』続考 —兼通の描かれ方—

堤 和 博

## はじめに

一九九三年一〇月初出の拙稿『本院侍従集』考―配列に施された虚構を中心として―<sup>(1)</sup>で、兼通と本院侍従に関する史実を検討の上でそれと『本院侍従集』の記事配列を対照し、『本院侍従集』の配列には虚構が施されている、28番以下の終盤部分に特に認められるこの虚構化からは兼通を訝えない人物として描こうとする意図が読み取れるなどのような仮説を提示した。長き年月を経て、今一度『本院侍従集』につい

て考えたい。当面の目標は、兼通を訝えない人物として描く意図が読み取れるという点の補強である。旧稿では、28番以下の終盤部分の読み取りについて十分に検討しないまま後に提示する先行論に寄り掛かって兼通が「慰められたりからかわれたりしている」ものとみ、さらに終盤部分の配列に施されている虚構に注目して、虚構によってそんな兼通の姿が強調されていると論じたのである。今回は配列に虚構が施されているか否かには拘らずに現存『本院侍従集』の配列のまま終盤部分の読み直しを行う。また、旧稿では検討しなかつ

ところで、『本院侍従集』の男女の主人公は、序文の内容や外部徴証からして、少なくとも当時の人には兼通と本院侍従だと読める。しかし本文には二人の実名は一切出てこず、

「男」「女」とされている。この方法は『伊勢集』冒頭の歌物語的部分と同じである。よって、『伊勢集』共々、実在人物から離れた仮想の男女の物語として読む必要があるとずっと考えているのであるが、『伊勢集』共々、実在の伊勢乃至

和 博  
は兼通・本院侍従の物語として読まれるのが一般である。本

堀  
稿でも、仮想の男女の物語としての読みは保留し、旧稿と同

様に、男女を兼通と本院侍従として読んでいく。序文で特に兼通がモデルであることが強く示唆されていることなどからすると、二人を主人公とみての読みが求められているのかもしれない。二人を取り巻く他の実在の人物、伊尹などの動向も当然問題となってくる。

さて、『本院侍従集』は、冷泉家時雨亭文庫本及びその写しである宮内庁書陵部蔵本（五〇一・一九七）とその他諸本

の系統に二分されるが、前者を異本系、後者を流布本系としておく。その前後関係については、高橋正治<sup>(3)</sup>が両系の冒頭を比較し、流布本系から異本系への改変の可能性を認めているなどが妥当だと考えるので、本稿では流布本系の本文を読んでいきたい。流布本系のうちでは、『海人手子良集本院侍従集義孝集新注』の「解説」が穂久邇文庫本を代表的本文と認定するのに従い、穂久邇文庫本を底本<sup>(2)</sup>とし、読みやすいように手を加え、他本により校訂も施した<sup>(6)</sup>。

#### 一 「堀河中納言とかや」について

いきなりではあるが最末尾の39番の後書部分（以下、「跋文」とする）に着目する。

そのころ、兵衛佐になりたまひにけり。堀河中納言とかや。<sup>\*</sup>

※ 底本「大」を冷泉家時雨亭文庫本により校訂  
序文では「まだとし十八ばかりなりけるが、おぼへいと

しこかりけれど、かうぶりえぬ」（兼通は天慶六年（943）正月従五位下、時に一九歳）とされていた兼通が、終盤部分では兵衛佐、そして語りの時点では中納言と、順当に出世している様を描いているように一応読み取れる。

ところで、この後直ぐに確認するように、兼通は権中納言から大納言を経ずに関白に就いているので、流布本系間で異同のない「大納言」は異本系の「中納言」の誤りとみて従来处理されていた。一方、安易に校訂せずに流布本系のままで読むならば、わざと大納言に設定したものととしてその意図を読み取らなければならない。すると、実際は大納言を経なかったことを却って浮かび上がらせようとしているなど、いくつか考え方はあるかも知れないが、それで読み通すのに適當な考えは容易には思いつかない。今はやはり「中納言」とあったのがいつの段階かで「大納言」に書き誤られたものと判断しておく。

ということ、ここで、兵衛佐とは順序は逆になるがその中納言についてから史実と照合すると、兼通は天祿三年（972）

閏二月に権中納言に就いている。その際、同時に兼家が権大納言になっているのに注意される。つまり、弟に逆転されていた頃のだが、遡って確認すると、康保四年（967）正月に兼家は従四位上になって従四位下の兼通を超えていた。

この件に関連し、守屋省吾が、当時は「一見政治的世界とは無縁と思われる和歌といった風騷の世界における活動も深く政治的世界に関わりを持つに至り、高位高官に位置しようとする者にとつても決して軽視できない」頃であったにも拘わらず、天徳四年内裏歌合にも康保三年内裏前裁合の後宴の歌合にも兼通が参画していないことに注意するのは見過せない。兼家は共に参画している。二人の官位が近づきやがて逆転する頃には、兼通の和歌の実力不足は歴然であつたらしいのだ。兼通権中納言在任中というのは、官位も高位高官に必要な和歌の実力も、兼通は兼家とは差を付けられていた頃を思わせるのである。

さて、この後の史実も追うと、天祿三年一月一日に伊尹が死ぬと兼通は『大鏡』などで描かれている苛烈な手段を用

いて兼家を凌駕、同月二七日には大納言を経ずに関白となる。兼通の権中納言在任は僅か九ヶ月程であった。

ところで、この跋文の二文目によって『本院侍従集』は兼

通権中納言在任中に成ったというのが定説だとさえ言われているが、この一文は語り手が語った時点を表しているとみるべきではないか。考えてみるに、作品がいつ編まれたかと語りの時点がいつに設定されているかとは別問題だ。ここからは憶測になるが、語りの時点がちょうどこの兼通権中納言在任中、即ち兼家を再逆転する直前と言うか兼家に逆転されていた末期の微妙な期間に設定されているのは何か意図があるのではないか。兼家を凌駕して関白にも就任した後の成立であるのを、語りの時点を権中納言在任中に設定し、兼家に後れを取っていたことを強調せんとしたのではないだろうか。たとえ成立が権中納言在任中だとしても、それをわざわざ書いているのは、兼通の官職上昇に合わせて時期の提示をするためではなく、兼家に先を越される程度の人物であったとの皮肉が感じられるのである。それは跋文一文目の兵衛佐

への言及と併せてのことであるので兵衛佐についても検討しなければならぬが、その前に跋文一文目と直接している終盤部分の兼通の姿を確認しておこう。

## 二 終盤部分の兼通

28番から最終39番迄の終盤部分は一纏まりと捉えてよいと思うが、ここを、嘆きに沈む兼通が本院侍従達から同情されたり慰められたりまたからかわれたりしていると旧稿ではみただのである。その兼通の描かれ方を、28〜34番と35〜39番に分けて、改めて確認しておきたい。

かくてすみたまふほどに、この女また人にぬすみて  
いなければ、男いみじぶなげきたまひて、女あはれ  
と思てなむかくいひやりける

28 よの中を思もくるしをもはじとをもふも身にはやまあなりけり

※ 底本「女」を宮内庁書陵部蔵本（五〇一・七

二) により校訂

男かへし

29 しのおれどなをわすられずをもほゆるやまひは君にわれ

ぞまされる

女

30 をもはずにあるよのなかのくるしきにまさるやまひはあ

らじとぞ思

この女うちにまかりにければ、いとみじうとをく

てなげきたまひける。ひさしう有て女いひたりける

31 わが身ゆへうしとはをもひおきながらつらきは人の心な

りけり

かへし

32 身のうきとをもひしりぬるものならばつらきころをな

にかうらみむ

かくてこの女、ふくになり給ぬときゝて、とぶらひ

きこえたる返事に、「いつも時雨は」との給ければ

33 我さへぞ袖はつゆけききふぢころも君をりたちてきるとき

くには

かへし

34 をとにのみきゝわたりつるふぢころもふかく悲しと今ぞ

しりぬる

本院侍従を他の男に掠われた28番詞書での兼通の姿は二重

線部のものであった。この事件を本院侍従を掠った男の側か

ら描くものとして必ず取り上げられる伊尹の『一条撰政御集』

31番以下(「とよかげ」を主人公とする歌物語的部分に含ま

れる)と比較すると、男の行動力の差は歴然だ。ここでは31

32番の贈答歌だけを挙げておく。<sup>10</sup>

とよかげ、なかのみかどわたりなりけるをんなを、

いとしのびてはかなきところにあてまかりて、かへ

りてあしたに

かぎりなくむすびおきつるくさまくらこのたびならずお

もひわするな(31)

かへし

くさまくらむすぶたびねをわすれずはうちとけぬべきこ

うちこそすれ(32)

『一条摂政御集』では33番以下でも37番歌を除けば歌はとよかげから贈られており、『本院侍従集』とは反対である。本院侍従に焦点を中てる、伊尹(とよかげ)を愛して兼通の方はそうでもないというわけでは必ずしもなさそうだが、『一条摂政御集』32番歌などからすると、本院侍従は伊尹(とよかげ)に靡きそうである。

博 『本院侍従集』に戻って続く本院侍従が宮中に出仕した31番でも本院侍従から兼通に詠み掛ける。この歌は兼通を慰める内容ではないが、詞書に目を転じると、二重線部で嘆く兼通がはっきりと描かれる。そこで『拾遺和歌集』巻十九・雑

恋・1263(『拾遺抄』巻九・465)に注目する。

一条摂政下らふに侍りける時、承香殿女御に侍りける女にしのびて物いひ侍りけるに、「さらになとひそ」といひて侍りければ、「ちぎりし事ありしかば」などいひつかはしたりければ 本院侍従  
それならぬ事もありしをわすれねといひしばかりをみみ

にとめけん

「承香殿女御」とは徽子のことで、『本院侍従集』28・29番の時と重なる可能性がある。稲賀敬二が28・29番の兼通とこの伊尹(一条摂政)の姿を比較して、「歎いているばかりの兼通と、拒否されても彼女を追う姿勢を捨てない伊尹とが、ここでも対照的である。」と評している。

続いては兼通の服喪で本院侍従が兼通を慰問する。服喪で慰めるのは当然だが、考えてみると集中でこの贈答歌だけが直接的な恋の遣り取りでないのは如何なるわけか。しかも既に二人の恋は破綻している。兼通が嘆く姿がさらに印象づけられるのである。

さて、この後にさらに失恋後の兼通に第三者の女達から歌が贈られてくる35〜39番があつて物語は終わる。

女ともだちのもとより、じらう君のもとに、「この女のほかざまになりたる、いかにおぼすらむ」とて

35 ほかざまになびくをみればしほがまのけぶりやいとごも

へわたるらん

かへし

36 しほがまのもゆるけぶりもなきものをからきなき名もた

つがわびしさ

とあれば、「まづおぼすらん事こそおほゆれ」とて、

御方のごたちのいひやる

37 はつ秋のはなのこゝろをほどもなくうつろふ色をいかに

みるらん

男かへし

38 ときわかずかきほにをふるなでしこはうつろの秋のほど

もしらぬを

またかへし

39 色かはるはぎの下葉もあるものをいかでか秋をしらずて

ふらん

といひやる

本院侍従を他の男に掠われた宮中に去られてしまつて為す術ない兼通に第三者の女が、同情を寄せているか、あるい

はからかっているのか、はたまた自ら恋に終止符を打てない兼通を窺っているようにも感じられる。

35番は、詞書の二重線部の発言と歌を併せると女の友達が兼通に同情を寄せていると思える。あるいは心底ではからかっているのかも知れない。とにかく続く36番歌で兼通は女に対する未練を否定している。<sup>(14)</sup>これに続く37番詞書の二重線部からはより微妙になってくる。一見引き続き女の友達が兼通のことを思い遣っているようだが、実はこの感想を持った女は別人の御達である。意味はややとり難いのだが、(まづは兼通様がお思いになっていることが思い遣られる)ということだと思われ(「まづ」は「おほゆれ」に掛かるとみる)、36番歌に示された兼通の訴えを額面通りには受け取らずに、(実はまだ未練があるのだろう)と思つて37番歌を贈つたのであろう。これも友達同様に同情を寄せているのか、あるいはからかおうとしているのか。その御達が贈る37番歌と39番歌を見ると、間の38番歌で兼通が撫子を持ち出して抗弁しているにも拘わらず、37番歌では初秋の花、39番歌では萩の下

葉と、題材を変えてまで執拗に本院侍従の心変わりを強調している。「本院侍従の身近でその日々の言動を見ているので、本院侍従の心がもう兼通の上にはないことをさとっていたか」(『新釈』より)と思われる御達が、(もう諦めなさい)と論しているのではないかとも思えるが、兼通の失恋をあげつらっているようでもある。

このように友達や御達の真意ははかりかねるのであるが、<sup>(15)</sup>いづれにせよ一方の兼通は28番から引き続いて為す術なく、本院侍従への未練ともに本院侍従の心変わりも否定するしかないのである。

以上のような兼通の有様を描いて直ぐさま「そのころ、兵衛佐になりたまひにけり」(兼通は天曆二年(948)五月左兵衛佐、時に二四歳)と書かれているのを続いて問題としたい。

### 三 「そのころ、兵衛佐になりたまひにけり」と序文

まずは兵衛佐について考えたい。『蜻蛉日記』は兼家の求

婚から記事が始まるが、道綱母は「柏木の木高きわたりより」<sup>(16)</sup>求婚があつたと表現する。「柏木」とは「兵衛」の異名であり、時に兼家二六歳で右兵衛佐であつたことによる。ここを端緒にして兵衛佐について考察を進める石原昭平の論考を私見も交えながら追っていく。

石原は、この『蜻蛉日記』の表現には兼家の「高圧的な態度」に対する道綱母の「反発の意識」が込められていると言<sup>(17)</sup>う。確かに兼家の求婚方法は粗略なもので道綱母は不満を覚えて<sup>(18)</sup>いる。この道綱母の受け止め方も当然重要だが、そもそも兼家の態度について考えると、最初の求婚歌が「音にのみ聞けば悲しなほとゝぎすこと語らはむと思ふこゝろあり」というものであつたことが問題である。この歌は後に検討する兼通の1番歌と同様に上句で「悲しな」と言つて嘆きを表明しているのであるが、下句ではそれをうち消さんがために歌としては如何かと思えるほどの直截的な表現を使つて強く出ている。<sup>(19)</sup>この兼家の求婚を石原は「高飛車な高慢ぶつた申し込み」とも言っている。それが、結婚後の同年秋になると、

道綱母は次の歌を詠んで兼家の夜離れを嘆くことになる。兼家は引き続き右兵衛佐在任中である。

柏木の森の下草くれごとになほ頼めとや漏るを見る見る  
柏木を詠み込む女の嘆きの歌について、石原は『一条撰政御集』159番も俎上に上げる。

あめしめぐとふりて、はしにながめて

かしはぎのもりはゝるかになりぬるをなにのしづくにぬ  
るゝそでなり

『一条撰政御集』のうちでも152と164番は女の独詠歌が並ぶ異質な部分だが、作者は本院侍従だと目されていて「別本院侍従集」と呼ばれることもある。それが『一条撰政御集』中に収められているのはやはり相手の男が伊尹であるからに違<sup>(2)</sup>いなく、男を柏木に喩えているので、時に伊尹が右兵衛佐であった天慶九年(946)から天曆二年(948)の間、伊尹二三と二五歳の頃の詠歌であろう。内容はと言うと、男が離れていった頃の女の涙を詠んだ歌である。次に、兼通の大叔父時平男の敦忠に関連する歌も石原は取り上げている。『拾遺和歌

集』巻十九・雑恋・1222番(『拾遺抄』巻九・雑上・451番)である。

中納言敦忠兵衛佐に侍りける時に、しのびていひち  
ぎりて侍りけることのよにきこえ侍りにければ

右近

人しれずたのめし事は柏木のもりやしにけむ世にふりに  
けり

恋が露見した時の歌であるがやはり石原の言う通り「この歌も、女の歎きの歌である」には違いない。

これらの例から石原は「兵衛佐」という官名は多くの貴公子たちが、若き日の恋愛の贈答歌を応答した時代にあてられた<sup>(2)</sup>と指摘するのだが、柏木を詠み込んだ女の嘆きの歌が目立つ。あるいは兼家の求婚時には、兼家の「高飛車な高慢ぶった申し込み」<sup>(3)</sup>の態度が、ある意味道綱母を嘆かせた(石原の言う「反発」、私の言う「不満」)。ともかくそれもやがては道綱母が兼家の夜離れに涙する歌を詠むことになるのであった。

ところが、兼通だけが兵衛佐になった頃に女に慰められたり同情されたりしている。しかも恋愛には直接関係のない服喪も含まれ、最後には第三者の女が二人までも口出ししてきている。御達には本院侍従の心変わりを念押しされてもいる。

柏木とそれを伴う女の嘆きのイメージとは正反対である。それで、跋文について考えると、〈兵衛佐なのに女に慰められたりし、権中納言である今は実は弟に官位を越<sup>2</sup>されてい<sup>3</sup>る〉という逆接的な意味合いが込められているように感じられないであろうか。

ここで、序文の「まだとし十八ばかりなりけるが、おぼへいとかしこかりけれど、かうぶりえぬ」に目を転じる。この一節は、兼通が五位に叙せられていないのをまだ年若であるせいにながら人望あることを強調せんとしているように一見読める。そして、跋文との照応を考えれば、本院侍従との関係継続の裏で、兼通は順当に出世していたことを示すとみるのが素直な見方だ。しかし、跋文の本当の意味合いを今確認したようなものと理解すれば、この冒頭の一節も、実は

跋文と連動した逆説的な皮肉で、十八歳頃でもう五位になっていてもおかしくないのになっていないと言いたいのではないか。ちなみに、伊尹が従五位下に叙せられたのは十八歳の時であった。

序文の一節に対するこの穿ち過ぎとも思える読み方は、跋文との連動のみならず、序文に引き続き序盤部分においても兼通はよろしく描かれていないように思えることにもよる。そここのところについて、先行の読解を参照しながら私解を述べていきたい。旧稿では触れなかったところである。

#### 四 序盤部分の兼通

まずは1番の兼通の愛情告白場面である。

……それこのじらう君思かけ給てかくよみてくれた  
まひけり

1 色にいでゝいまぞしらす人しれずをもひわびつるふか  
きころろを

1番歌は一見平凡な男の愛情告白の歌と見えるが問題を抱える。『朝忠集』23・24番にも朝忠が本院侍従に懸想を仕掛けた際の贈答歌があるので、それとの比較から始めたい。

又おなじ女に

いはでのみ思ふ心をしる人はありやなしやとたれかとは  
まし

返し

しる人やそらになからん思ふなる心のその心ならでは  
『本院侍従集』1番歌に続いてこの二首が『新勅撰和歌集』  
卷十一・恋一・638〜640番に採られている。『新勅撰和歌集全  
釈四』<sup>26</sup>は、朝忠歌について「兼通の歌とは対照的に、かなり  
屈曲させて詠んだ一首である。そこに、思いあぐねた末に打  
明けたという気持がよく表れており、余情も深い。見方を変  
えれば、物馴れた老練な詠みぶりの歌とも言えよう。」と評  
している。朝忠は兼通より三十歳程年嵩のようだが、やはり  
朝忠の詠みぶりと比べて兼通歌の劣るところが気に掛かる。

この兼通の歌の至らなさを伊藤一男<sup>27</sup>が突いている。「色に

いづ」と「人知れず思ふ」を詠み込んだ歌を検討し、「思い  
の程を相手に伝える方途のないことを嘆くもの」や「自分の  
内に秘めた思いが抑えきれずに表面に出してしまうことへの危  
惧を詠むもの」はあっても、兼通歌のように「積極的に自分  
の思いを相手に伝えようとするもの」はないと言ひ、「和歌  
表現の習わしから外れ」ているとも批評するのである。

さらに「伊藤注釈」は先に挙げた『蜻蛉日記』最初の兼家  
の求婚歌の下句の「こと語らはむと思ふこゝろあり」という  
「直截表現」との比較もしている。兼家の歌は兵衛佐在任中  
の二六歳の時に詠まれたもので、兼通の歌が詠まれたのはず  
つと若い頃になるのだが、私も比較したい。共に直截的な表  
現と「悲しな」と「をもひわび」という嘆きが詠まれている。  
ただし、兼家歌は前節でみた通り結局「高飛車」で「高慢」  
な態度になっている（「伊藤注釈」では「権門子弟の自負と  
尊大さ」としている）のに対し、兼通歌は（この時点では兵  
衛佐ではないものの）、逆に上句で強く出ながらその強さは  
「をもひわびつるふかきこゝろ」を訴えんとするところに収

斂している。これならやはり「自分の内に秘めた思いが抑えきれずに表面に出してしまうことへの危惧」を詠むべきであったと思う。

一方で兼通の歌については、『新勅撰和歌集全積四』は「率直な言葉」とか「若い貴公子」の「初々しさを感ぜさせる」とか言っており、「伊藤注釈」も「若者らしい性急さと情熱」を見て取っている。ただし「伊藤注釈」はそれを「不粹」だ

博 と言う。確かに「性急さ」などは、この後で引く2番詞書に書かれてるように、返歌も待たずに引き継いで女の里を尋ねる態度の方にも現れている。交々考慮すると、ここで描かれているのは、「率直」さでも「初々しさ」でもなく、「習

堤 わしから外れ」た歌を贈って返歌も待たない「性急さ」を見せつける恋愛情緒からは懸け離れた兼通の姿だと考える。

ちなみに、「権門子弟の自負と尊大さ」を見せつけた兼家の歌も、歌のできとしては感心しないものであったには違はなく、特に和歌に強い拘りを抱く道綱母にとっては不満であったと考える。しかし、兼家はそんな道綱母の拘りに気付い

たのであろう、その後は結婚成立までは作歌に力を入れ始めるのが『蜻蛉日記』から見て取れる。一方、『本院侍従集』におけるその後の兼通の詠歌について先走って言うとおくと、作歌に力を入れている風はなく、特に中盤部分で関係が成立した後は涙や泣くことを詠むばかりで、むしろ作歌能力の低さを露見してしまうのである。

次の23番の贈答に移る。

などのたまで、「御さとはいづくぞ」との給ければ、  
女ほそ殿にて物など云に

2 わがやどはそこともなにかをしふべきいほこそみめた  
づねけりやと

※ 底本「し」を宮内庁書陵部蔵本(五〇一・七  
二)により校訂

男

3 我思そらのけぶりとたくひなば雲井なりともなをたづね  
てん

2番歌について『注考伊勢集及本院侍従集』は、有名な「わ

がいほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(『古今和歌集』卷十八・雑下・982)を「踏んでゐる」とする。この古今歌の初句について『新装ワイド版古今集校本』にあたると、基俊本(ノートルダム清心女子大学蔵黒川本の校異)、俊恵使用俊成本(俊恵本の校異)では「わがやどは」となっている。『新撰和歌』卷四・316番、『古今和歌六帖』第二・1364番、さらには俊成自筆本『古来風躰抄』でも同様である。それで、本院侍従はこの古今歌を意識して、(三輪山麓の人(三輪明神)は、「わが宿」を積極的に教えて来訪を促したが、私はどうしてあなたに里を教えたりしましようか)とかいうきつい皮肉を込めたと読み取れよう。『新注』の「解説」は「女はあえて自分の出自は示さず冷淡とも言える態度で男の動向を見守る」と言うが、1番歌には返さなかつた本院侍従は(あるいは返す間がなかつたのか?)、兼通の言葉による質問には歌で「冷淡」に答えているのである、「見守る」ということではないと思う。それに兼通が3番歌で雲井を持ち出して抗うのは、本院侍従歌が古今歌を意

識しているとすれば、焦点がずれてしまっている。この贈答歌においても、男はよろしくは描かれていないのである。

ところで、23番歌は『新古今和歌集』卷十一・恋一・1006

1007番に採られている。『新古今和歌集全注釈四』は本院侍従

歌について「男と対等に応答した後宮女房の風貌がいきいきと浮かぶ歌である。(中略)女は男の誠意の有無を試みようと言言するのである。後宮女房ならではの歌と思わせる。」と指摘する。「男と対等に応答」という以上に、男を手玉に

取る後宮女房の姿が髣髴とし、その分兼通の姿が霞む。

45番の贈答に移る。

またをとこ

4 われならぬ人はまつともすぎくれはいのちをすてゝひく

かたによれ

かへし

5 君ならぬ人はまたねどすぎくれのひくとてよらむ心よは

さよ

ここで、「われならぬ人」の存在を言いながら自分の方は

命を捨てるという兼通と、「きみならぬ人」の存在を否定しながら「簡単に靡けないという女の心」(『新注』)を表明してくる本院侍従の遣り取りとなっている。女に別の男がいることが示唆されるのも、後宮女房として相応しいであろう。

それはともかく、その別の男とはやはり伊尹が思い浮かぶ。

3 番歌迄で兼通がマイナスに描かれているところを強調し過ぎたきらいがあるかも知れないが、伊尹の存在を透かし見ながら1番から改めて辿ると、兼通は伊尹の存在を知りながら本院侍従に懸想し、2〜5番では真面に相手にされず、特に

堤

2 番歌では本院侍従に冷たくあしらわれているという有様が浮かんでくるではないか。やはりこの時点で本院侍従は伊尹に心を寄せていたのであろう。さらに想像を逞しくすれば、伊尹は本院侍従の出自なども知っていたのではないか。二人の仲は既にかなり進んでおり、そこに兼通が割って入ろうとして本院侍従にいなされているとまで読めるのかも知れない。

このような本文にはない背後まで読み取ろうとするのは、

先行諸論によると、伊尹と本院侍従の関係を描く、恐らく基は歌語りであったであろう遣り取りが、『一条撰政御集』の他撰部に存在するからである。

本院のにや、じぶうのきみへとあり

すこしだにいふはいふにもあらねばやいふにもあかぬこ

ゝちのみする (113)

をんな

ひとりぬるとこになみだのうきぬればいしのまくらもう

きぬべきかな (114)

本院のじぶうのきみのもとにおはしそめて、あか月

に、ほとゝぎすのころにや

あかつきになりやしぬらんほとゝぎすなきぬばかりもお

もほゆるかな (115)

をんな

ふたしへにおもへばくるしなつのよのあくてふ事なわれ

にきかせそ (116)

またあひそめたまはでとしへたまたりけるに、せち

にまちてゆるいたまたりける。にはかなることゝの  
たまへば、をんな

いにしへはゝしのしたにもちぎりおきてなをつたへても

ながさずやきみ (117)

をとこの御返し

そはされどゝらへどころのありければはしゝたならでな

がれざりきと (118)

114 番歌は 113 番歌と繋がらないと思われるので 113 番を単独で

見ると、この歌は二人の関係成立前のものと思われ、本院侍従が伊尹の懸想の言葉をあまり受け入れようとはしない様子がうかがえる。それは 117 番詞書二重線部前半からもうかがえる。しかし本院侍従が伊尹に関心を持っていたことは、117 番詞書二重線部後半で突然伊尹を受け入れているところから分かる。本院侍従は古くから取り沙汰されているように出自や育ちに何か複雑な事情を抱えているようで、伊尹に心引かれながらも愛情を簡単には受け入れられなかったのではないか。でも、最終的には受け入れているのであり、それは、な

ぜか順序が逆に配されている 115 116 番の贈答（特に 116 番歌の二重線部）にも表れている。なお、117 番詞書二重線部前半によると伊尹が本院侍従に懸想し始めてから関係成立まで数年掛かっているのが、伊尹が恋し始めたのは十六、七歳頃の頃になるう（伊尹と兼通は一歳違い）。

こんな伊尹と本院侍従の数年来の恋が叶ったところに兼通が割って入ろうとし本院侍従には冷たくされた、と『一条撰政御集』にある歌も併せると『本院侍従集』の冒頭辺りは読める。ところで、116 番歌の初二句が伊尹と兼通の兩人を思っていることを言っていると稲賀敬二は解するが、これは和歌解釈上無理であろう。「ふたしへに」は〈夏の夜が「明く」〉と〈あなたが私に「飽く」〉であろう。本院侍従は〈私に飽きたなどということを私に聞かせるな〉と、つまり、男に心寄せていることを歌っているのであり、それは後朝の女の返歌として普通の内容である。

さて、引き続き 6 ～ 8 番はおもしろい状況が描かれる。

をとこに、やりどをいさゝかあけてものいひけるに、

ひとこともつゝましようおぼえて、「むねいたし。や  
きいしあてむ」とていりにければ、をとこわびてい  
にけり。又の朝に

6 あはずしてかへりしよりもいとゞしくくるしといひし事  
ぞわびしき

かへし

7 ねぬ※な※は※のくるしき事はとふことをこたるをりぞうれ  
しかりける

※ 底本「ねぬる夜」を冷泉家時雨亭文庫本によ

り校訂

和 博

男

8 ねぬ※な※は※のくるしき事をこたるはわかゝくれたるしる  
しなるらん

※ 底本「ねぬるよ」を冷泉家時雨亭文庫本によ

り校訂

かへり事なし

まず、「やりどをいさゝかあけてものいひけるに」という

のは、『新注』が類例として引く『実方集』の歌からもうか  
がえるように、女が男に打ち解けていない様子を表す。

やりどをほそめにあけてものいひ侍りし。きぬのす

そにむすびつく

いにしへもちぎるころにむすびけむころものつまはと

くやとけずや (248)

続く「ひとこともつゝましようおぼえて」となっている所は

解釈は難しい。穂久邇文庫本と同じ本文を持つ松平文庫本を

底本とする『本院侍従集全ごも積』は、「お話をしていたが、(a)

一言言うのも恥かしくって)(b)外聞も憚られて)」と、通

積に二案を示している。一方『新注』も流布本系の異同に目

を配り、「諸本の本文で解釈すると、「語らっていたが、一

言交わすことも憚られて」あるいは「語らっていたが、数日

来それは憚られると思われて」となる。」としている。『全

積』の(a)案の「恥かしくって」が女の男に対する恥じらいを

意味しているのだとすると、これまでの本院侍従の態度(特

に2番歌や5番歌)とは相容れないであろう。それを除くと

いずれにしても、本院侍従は兼通との会話を憚っている。

続いてついに本院侍従は「むねいたし。やきいしあてむ」

と言って引つ込んでしまう。より重要なのは「こた」だと思うが、

焼石を巡るこの件に関しても先行緒論で見方が分かれている。

そんな中、『落窪物語』で典薬助が落窪の姫君の部屋か

ら追い出される場面を『新注』が類例として挙げていて参考

になると思う。つまり『落窪物語』共々『新注』も言う通り

「男を帰すための口実」に焼石は使われているのであり、男

は厄介者としてあしらわれているとみられるのである。ちな

みに、多武峯に登って出家した異母弟高光の妻（師氏女）を

兼通が見舞う場面が『多武峯少将物語』にある。この時兼通

は「彼女に下心を持」っていたとみる松原一義は、兼通の人

柄を説明するのに6番の場面を引き、「むねいたしやきい

しあてむ」というのは、恋故の痛みを焼石（温石）で治療し

てしまおうというもの。本院侍従のこのせりふは兼通を相当

からかったもの」と言っているが、その通りだと思う。つま

り、「むねいたし」というのも、「恋故の痛み」であること

を匂わせているだけであって実はただの仮病だとみられるのである。

ところで、伊尹と本院侍従との関係の中で遣り戸が出てく

る場面が、『一条摂政御集』他撰部にもある。

たれとしらず、人ともものゝたまふにやりどをたて

いりたまひぬれば

あちきなやこひてふ山はしげくとんひとのいるにやわが

まどふべき（98）

たちたまひにけり。をんないしとかはらとをつゝみ

て

わがなかはこれとこれとになりにけりたのむとうきとい

づれまされり（99）

かへし、本院にこそ

これはこれいしといしとのなかはなかなかのむはあはれう

きはわりなし（100）

この一連の相手の女が本院侍従であることは100番詞書二重

線部からうかがえるのみで、しかも98番詞書二重線部からす

ると、当初は相手の女が誰であるかは伏せられていたらしい。

よって相手の女については問題なのだが、伊尹の周辺から資料を集めて成ったと思われる『一条摂政御集』他撰部であるから、100番詞書に重きを置いて考えてよいであろう。すると、

「遣り戸」が出てくるという一点だけによるのだが、『本院侍従集』と同じ場所同じ時期である可能性が高い。ということとは、本院侍従は兼通のみならず伊尹も遠ざけようとしているのだから、兼通を遠ざけようとするのも強ち本心からだとなくて男を避けなければならない事情を抱えているからだとも考えられる。しかし、『一条摂政御集』の特に99番を見ると、詞書傍線部の「いしとかはらとをつゝみて」という行為

堤

が意味するところと上句が掴み難いのはあるが、下句は「それでも頼りにならぬ末を頼むのと、別れのうさと、どちらがましでしょうか」（『一条摂政御集注釈』（注10参照）の口語訳より）と解せよう。要は男に（末を頼む方がまし）さらには（末は頼りになるので末を頼むがよい）と答えて欲しいものと受け取れる。それに答える100番歌特にその結句について

考えると、ここを「拒むというなら是非もない」と訳して「初

句、三句、四句で切れ、詰屈としてやや投げやりな形となっている。」と評する『新日本古典文学大系平安私家集』のよ  
うな見方もあるが、『一条摂政御集注釈』が「別れるといわれれば、これは困ったことだなあ」と訳しているのが妥当であろう。つまり、ここら辺りは痴話喧嘩のような雰囲気がするのである。『本院侍従集』6番詞書が描く状況と『一条摂政御集』98〜100番が描く状況を比べると、遣り戸が出てくるところは共通するが、そもそも『一条摂政御集』では98番詞書傍線部「ものゝたまふ」時点では遣り戸をたててはおらず、歌の内容からも本院侍従が伊尹に打ち解けていない感じはしない。さらに「やりどをたてゝいりたまひぬれ」という後にも贈答歌が成立している。あれやこれやと考えると『本院侍従集』とは正反対に近いのである。あるいは先に見た113〜118番のうちの関係成立前、本院侍従が伊尹に心引かれながらも何らかの理由で伊尹を遠ざけようとしていた頃と時期的に重なるのであろうか。

ちなみに、鈴木脩<sup>37</sup>は、実在の本院侍従から説話の世界の本院侍従までを追い、「本院侍従と因縁ある書物が、既に一系の好笑の文學であり、一種の説話集でもあつた」と結論する。そして右に取り上げた『一条摂政御集』と『本院侍従集』を並べ、「何れも同じ一本の根をもつた枝の茂りに他ならぬ」と言う。確かに、『一条摂政御集』でも「をんな、いしとかはらとをつゝみて」などというのは、『本院侍従集』の焼石にも通じる女が男を翻弄する笑いを誘う状況設定のようにも思える。しかし、右に述べたことから、『一条摂政御集』と『本院侍従集』とは、特に女の心情において本質を異にする話柄になっていると考えるのである。

さて、『一条摂政御集』との比較を離れ、6番詞書の状況と8番迄続く贈答歌との繋がりを確認したい。まず本文が問題だ。7番歌8番歌ともに流布本系ではすべて初句が「ねぬるよ(夜)の」となっている。例えば『全釈』はこれによって「夜、床について」と解釈しているが同意しかねるし、他に納得のいく解釈も見当たらない。『新注』が「意味が通じ

ない」と言つて、「な(奈)と「る(留)・「は(者)と「よ(与)の誤写によるものと考えられる。」と想定するのに従う他ないであろう。すると、6番歌で兼通が本院侍従の病状を思い遣つたのに対し、本院侍従が7番歌で「あなたの訪れが間違になるのが嬉しい」と皮肉を返したことになる。6〜8番の贈答歌でも本院侍従の拒絶的で冷淡な態度は変わらないのであり、6番詞書を前述の通りに解すれば、6〜8番への繋がりも滑らかなのである。

なお、8番歌の第四句「わがかくれたる」は解釈が難しいが本文異同はない。『新注』は、焼石を持ち出した本院侍従の口実を「初めから見透かしていた」兼通が「黙っておとなしく帰つた」ことを指すと言う。そして、後書「かへりごとなし<sup>38</sup>」は「女はもう何も返事ができなくなつてしまつた」ことを示すと言う。今まで本院侍従が優位で兼通が劣位であると読み取ってきたが、この解ではそれが逆転しているののごとくである。しかし、そもそも、「隠る」は「見えなくなる」こと<sup>39</sup>の意だからここでは兼通が帰つたことを意味するとの

『新注』の説明には無理があろう。「隠る」については他の論を参照しても納得のいくものではなく、かと言って適当な別解も思いつかないのだが、とにかく8番後書については、これを前からの継続で考えると、本院侍従が贈答を打ち切ったことを示しているものと思われる。すると、『全釈』が「前述のように、本院侍従には複数の恋人があり、ことに彼女の本命は伊尹であつたらしいから、7歌のような、つれない歌を詠む。兼通は、8歌では、それにもかかわらず、なんといわれようと必死でとりついている態。兼通の方が年下で純情

博  
和  
堤

のようである。8歌への女の返事はないのである。」と述べることがごとき読みができるであろう。ただ、兼通の「純情」ではなく本院侍従に翻弄（ひら）されている兼通の姿が読み取れると思

う。  
次に兼通がよろしくなく描かれていると思うのは、愈々関係が成立する13 14番のうちの特に13番詞書である。

さても（さ）のきこえんと、せちにの給ければ、「たゞも  
のこしにてうけたまはらむ」とありけるに、この女

のつかひける人をかたらひていりたまひにけり。さ

らに人もしらぬ事なりけり。またのつとめてをとこ

13 露のをきてあかぬ心にわかるればわがころもでぞかはか

ざりける

かへし

14 衣でもぬるときくにもいとゞしくわれさへ夏のよぞうか

りける

関係は成立するが、その直前まで本院侍従は拒絶的で冷淡な態度を維持していたのが二重線部からうかがえる。ここで

「ものごし」とある所は、冷泉家時雨亭文庫本では「しとみ

ごし」となっている。『新注』は「薨」について説明した後

「ものこしにて」では、几帳や御簾ごしという意になる。

それよりも底本の方が男を遠く隔てていることになり、具体

的に男への遇し方が分かる。」と言う。どちらでも女が男を

「隔てていること」には相違ないのであり、ただ「しとみご

し」ならより「遠く隔てている」ことになるのである。いず

れにせよ、ここまでは先に見た伊尹と本院侍従との関係にお

いてもそう変わりはないかも知れない。『一条摂政御集』117番詞書でも「せちにまちて」という状況が描かれていた。しかし伊尹の場合は俄に本院侍従が受け入れたのに対し、兼通は侍女を籠絡しなければならなかった。この差は大きい。

13番詞書では、『新注』が「読者を意識した草子地的な書き方」という傍線部も気に掛かる。一般に男女の仲は秘めておくべきもので、本院侍従の場合は伊尹との関係も含めて特別に秘めておかなければならなかったようである。それをわざわざ示すのがこの草子地だとも思える。それはともかく、『朝忠集』に次の歌があるのは看過できない。先に引いた23番の贈答歌の直前の歌である。

本院のじじゅうとかね道のきみとねたるをたちぎきて

よそにわれ人とひととをききしかばあはれとも又あなうともおもふ(22)

これによると、兼通と本院侍従の仲はなぜか即座に本院の外にまでも漏れ聞こえたいらしい。秘め事が秘め事たり得ていな

いことで兼通と本院侍従の関係は所詮はうまくいっていないことを示唆するのが件の草子地ではないのか。

13 14番歌の内容に入っていこう。13番歌は後朝の男の歌として普通であるが、14番歌はどうか。『全釈』は、夏の夜は短いものだと説明しながらこの歌に「不本意な契りを憂く思う気持ちを含んでいる。」と言い、通釈では「私までも短いと聞く夏の夜が一層いやなものでしたわ」としている。しかし、和歌で「夏の夜ぞうかりける」と言えば、やはりその短いことを辛く思っているのであり、『全釈』が説くような意を詠むのならもつと別の表現が求められるであろう。この歌は、『新注』が説くように、「私も夏の夜がつらいという気持ちで、二人の心情がびたりと合った返歌になっている」と解される。つまり14番歌も新枕の後朝の女の返歌として普通の内容なのである。ここで今までの本院侍従の拒絶的で冷淡な態度は一変する。それは男女関係の進展における歌の贈答においては常套的なことであろうが、『本院侍従集』の場合には本院侍従の兼通に対する冷淡な態度が目立ち、しかもそれ

が関係成立直前まで続いていたことからすると、意外である。よって、14番歌に対する『全釈』の理解も出てくるのである。うが、そうは受け取れない。

ここ以降28番で本院侍従が伊尹に盗み出されるまでの中盤部分は、男女間の恋の贈答歌の遣り取りの常套にも則った兼通からの詠歌と本院侍従の切り返しの返歌の応酬が続く。今まで確認してきた終盤部分・序盤部分とは様相を異にする。

博 『本院侍従集』を全体的に捉えようとすると、14番で「二人の心情がびたりと合った返歌」がなされてから中盤部分をどう捉えるか非常に難しい。ただし、先にも一言したように、兼通の歌は涙や泣くことを詠むものばかりで単調である。また、詞書は非常に簡略で話の展開もほとんど見られない。これらの点も序盤部分・終盤部分とは異なる。そういうことからすると、兼通の作歌能力の低さを目立たせたい、あるいは、

本院侍従が兼通に心寄せているところは詳しくは描かないなどの意図があるとも思える。

さて、本稿では中盤部分の問題にはこれ以上切り込まない

ので、論の焦点を序盤部分に戻す。序文で「おぼへいとかしこかりけれど……」などというのは、跋文と連動した逆接的な皮肉ではないかとも考えたのだが、この読みはこれだけでは強引な気もするので、序文に近い序盤部分でも兼通が冴えない人物に描かれている所が多いことを本節で順次指摘していったのである。序文でいう「おぼへ（え）」は人間としてのあるいは貴族としての人望のことであり、恋の道においてどうのこうのということではないと思うが、それにしても序盤部分において描かれた兼通の姿は、人望のある人物とは受け取れない。ちなみに、終盤部分においてはその点がより顕著であった。

## 五 今後の課題（旧稿との関連も含めて）

以上、跋文二文目、終盤部分と跋文一文目の関係性、跋文と連動しているものとしての序文と序盤部分の関係性の順で検討してきた。それは、『本院侍従集』の編纂には兼通を冴

えない人物に描く意図が働いているのではないかと旧稿で述べたことを補強するためであった。

もつとも、序盤部分で強引に関係を求めてそれを果たし、中盤部分に入る辺りからは「二人の心情がびたりと合っ」といたと総括するのならば、兼通の姿はけっして冴えないというようなものではないという批判があるだろう。が、背後にいる伊尹の姿を透かし見れば、やはり兼通は冴えないように描かれていると見て取ったのであるが、いかがであろうか。

ところで、旧稿では、「兼通は伊尹の後継者として相応しい人物ではないことを、文学の上で示そうとしたのが『本院侍従集』ではないかと私は思うのである。」という憶測も述べておいた。今から思うと突っ込んで書き過ぎたような気がする。かつ、それを憶測であると断りはしたのだが、旧稿の主要な結論であるかのような書き方をしてしまい、兼築信行の研究発表で批判を受けたのは痛かった。しかしながら、他の作品における兼通の描かれ方にも目を遣れば、第四節で言及した『多武峯少将物語』がある。さらには、『蜻蛉日記』

下巻に見える兼通が登場する所を取り上げて庄司敏子が、「兼通の行動をどこか滑稽に、揶揄したように描くことでその政権を批判的に描いていることが考えられる」と述べているのには大いに注意される。本稿でも特に跋文や序文に対して穿ち過ぎとも思える読み方を敢えて示したのは、実は『本院侍従集』の周辺にあると言ってよいこれら作品における兼通の描かれ方を考慮した面が強い。『大鏡』における兼通像をも視野に入れば、旧稿でも引いたように、渡辺実が「とにかくに兼通はやや異常であったのだろう」と言う程なのである。旧稿で述べた憶測は、今後も検討課題としては持つておきたい。

さらに、拙稿「本院侍従の歌語り―道綱母を取り巻く文壇―」では、最後に出てくる第三者の女達が『本院侍従集』の編者である可能性にも言及した。本稿においては、編者が兼通側の人物ではありえないであろうと旧稿で述べた考えは補強できたと思うが、編者が誰であるかまでには踏み込めなかつた。

『本院侍従集』を兼通と本院侍従の物語として読むとしても、第四節でも述べた中盤部分をどのように捉えるかという問題とともに、以上のような事柄を今後詰めていくことがさらに課題として残ってしまった。

**付記** 本稿における『本院侍従集』『一条摂政御集』『蜻蛉

日記』に関する論述は、注1拙著と『蜻蛉日記上巻前半部研究』（二〇二〇年一〇月・新典社）で展開したものと重なる。一部考えを改めたところもある。

和 博 堤

**【注】**

(1) 『詞林』14。後、『歌語り・歌物語的隆盛の頃―伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学―』（二〇〇七年一〇月・和泉書院）に所収。以下、この拙稿を旧稿とする。

(2) 『本院侍従集』を兼通・本院侍従から離れて「男」「女」の物語として読むのは却って難しいのである。磯村清隆「本院侍従集における和歌の機能とテキスト言説」（『城

南国文』15・一九九五年二月）が「いろいろな物語で、恋愛場面になるとそれまで具体的な呼称を与えられていた人物が、一転して「女」「男」としか呼ばれなくなる。それを「臙化」という把握で済ませてしまっただけだろうか。」と問題提起するのがヒントになるか。

(3) 「本院侍従集覚書」（『清泉女子大学紀要』10・一九六三年三月）。高橋は、異本系宮内庁書陵部蔵本（五〇一・一九七）の冒頭「いまはむかし」と流布本系宮内庁書陵部蔵本（五〇一・七二）の冒頭「おぼえおはしける」を比較し、「物語化することに興味をもっていた時代としては、「おぼえおはし<sup>つゞ</sup>ける」を「いまはむかし」と改変することは考えられるが、その逆は到底考えられない。」とする。また、兼築信行は、二〇二一年一月一三日の和歌文学会例会における研究発表「『本院侍従集』はどう読めるか」において、冷泉家時雨亭文庫本は流布本系をもとに本文を整えたものである可能性を示した。冷泉家時雨亭文庫本の仮名遣いは定家仮名遣いに完

全に一致していることも報告している。本稿では、『本院侍従集』の元の形になるべくよりたいたので、流布本系を基にする次第である。

(4) 片桐洋一・三木麻子・藤川晶子・岸本理恵、二〇一〇年一月・青簡社。以下、『新注』と略称する。底本は冷泉家時雨亭文庫本。なお、「解説」は藤川晶子の担当。

(5) 『日本古典文学影印叢刊8 平安私家集』(一九七九年七月・貴重本刊行会)による。なお、旧稿では流布本系の群書類従本を底本とする『新編国歌大観』によった。

(6) 庄司敏子「『本院侍従集』の贈答歌―六・七・八番歌の解釈を中心に―」(『平安朝文学研究』17・二〇〇九年三月)が、従来の読みに対して、「二系統の伝本の都合のよい記述のみを選んで論じてきた」、「二系統ある本文をきちんと整理せず、都合のよい部分のみを使用してきた」などと批判するのにも耳を傾けたい。それでもなお、流布本系では読み解けない等の所で、冷泉家時雨亭文庫本によって校訂した場合もある。なお、冷泉家時

雨亭文庫本は『冷泉家時雨亭叢書平安私家集十』(二〇〇四年八月・朝日新聞社)による。

(7) 古く『女流文学叢書第一編』(一九〇一年九月・東洋社)は、もともとは「堀川の大納言」であったのを「堀川の大納言」と誤った可能性を示すが、従いがたい。

(8) 「歌人藤原兼通の実像と虚像」(『平安文学研究』50・一九七三年七月)。なお、『本院侍従集』は兼通権中納言在任中に成ったとみる守屋は、続けて、歌人として実力がなかった兼通が、本院侍従にすべての作中歌も創作させて『本院侍従集』を編ませた、それが伊尹没後の兼家逆転にも繋がったと想定するが、この想定には同意できない。本稿における『本院侍従集』の内容分析からして、兼通が創作させたとはいえないからである。旧稿も参照。守屋論に関連しては、山口博「撰関家歌壇と私家集」(『王朝歌壇の研究』村上冷泉  
四巻朝篇)一九六七年一〇月・桜楓社)も参照。

(9) 例えば、鈴木あき子「本院侍従集私論―その歌物語的

性格と成立事情―(『国文』78・一九九三年一月)は、

のが定説である。

「これ(兼通関白就任のこと)以降の成立ならば当然関白と記したはずだから」という理由のもと、権中納言在任中の成立を「定説」と認める。旧稿はこの「定説」に従った。語り手の設定を考慮に入れると、兼通権中納言

(11) 『一条撰政御集』を除く歌集からの引用及び歌番号は、『新編国歌大観』Web版により、読みやすいように手を加えた。

在任中の成立とは必ずしも言えないと今は考える。それにしても、旧稿でも言及した通り、『一条撰政御集』な

(12) 『一条撰政御集注釈』(注10参照)補注(四)並びに竹鼻績『拾遺抄注釈』(二〇一四年九月・笠間書院)参照。

どの物語私集流行のことも考えると、『本院侍従集』の成立も、兼通権中納言在任中からそう遠くない時期だと想定される。語り手の設定については、磯村清隆(注2に同じ)参照。なお、冷泉家時雨亭文庫本では跋文の二文目冒頭に「いまは」が付いているが、これによると(語っている今は)と受け取れよう。

(13) 「本院侍従―その生涯と集―」(『広島大学文学部紀要』36・一九七六年一二月)なお、以下稲賀論に言及する際はすべて同論文による。

(10) 『一条撰政御集』からの引用及び歌番号は、一条撰政御集輪読会『一条撰政御集注釈』(一九六七年一月・塙書房)による。なお、31番詞書にある「なかのみかどわたりなりけるをんな」が本院侍従のことであるという

(14) 36番歌は冷泉家時雨亭文庫本では「塩竈のもゆる煙もある物をからきなげきをたくがわびしさ」となっていて、流布本系とは兼通の訴える主旨が逆になる。38番歌の内容からすると冷泉家時雨亭文庫本の方が整合性が取れていると『新注』は言うが、本稿では流布本系に従って読み進める。

(15) 高橋正治(注3に同じ)は、「おぼすらんことこそ

おぼゆれ」とあることによって、女の友達はそれまで男が遊び半分の恋をしていたと思っているのであり、男に対する冷笑のまなざしを感じるのである。」と述べる。

荻窪昭子「本院侍従集試論」（『国文目白』17・一九七八年二月）は、「女の友人と兼通との贈答を考えると、この友人の歌には女に振られた男に対しての、嘲笑的な冷淡さが感じられる。そのために悲恋の貴公子という姿が、まともに読者に伝わってこないのである。」と言う

（高橋、荻窪ともに御達も含めて「友達」とか「友人」とか言っていると思う）。私も、最後に第三者の女が出てくる所を旧稿では女達が兼通をからかっていると読んだ。「冷笑のまなざし」や「嘲笑的な冷淡さ」に近いものを感じていたのである。28番以下に「兼通から積極的に詠まれたものは一つもない」ことに着目する鈴木あき子（注9に同じ）の論も参考にした。今回改めて細かに読解すると、第三者の女、特に御達が、二人の恋愛の清算を兼通に働き掛けているようでもあると考えるに至つ

た。

(16) 『蜻蛉日記』からの引用は、柿本奨、角川文庫『蜻蛉日記』（一九六七年一月）による。

(17) 『蜻蛉日記・上巻の歌物語性―歌の効用とその変貌―』（『平安日記文学の研究』一九九七年二月・勉誠社）。

同論は途中で脇道に逸れている所があつて全体を掴み難いのだが、本稿の興味に沿って同論の説くところを参考にしたものである。

(18) 道綱母が「柏木の木高きわたりより」と表現したことについては、兼家の求婚歌に時鳥が詠み込まれていたことも関連していると思われる。増田繁夫『蜻蛉日記作者 右大将道綱母』（一九八三年四月・新典社）参照。

(19) 下句の表現については注18の増田著書参照。

(20) 『一条撰政御集注釈』（注10参照）「補注（十四）別本院侍従集の混入」参照。

(21) 西原和夫「本院侍従について」（『国語と国文学』25巻3号・一九五〇年三月）参照。

(22) 石原は『大和物語』第二十一段も挙げてゐる。(引用は『新編日本古典文学全集』一九九四年一二月・小学館による)

良少将、兵衛の佐なりけるころ、監の命婦になむすみける。女のもとより、

柏木のもりの下草老いぬとも身をいたづらになさずもあらなむ

返し

柏木のもりの下草老いのよにかかる思ひはあらじ

とぞ思ふ

となむいひける。

諸注釈による考証によれば、良少将(良岑仲連)の場合「若き日の恋愛」というわけではさなそうである。

(23) 石原論中にあるこの一節は、「兼通が天曆二年から四年まで右兵衛佐であったから、長男から次男三男というように、この官職を踏襲したことになり、「柏木の木高きわたり」とは、まさに藤原北家の御曹司たちの高

飛車な高慢ぶつた申し込みという感じをもった」という行文の中にある。伊尹については恋愛・結婚の申し込み時の例は挙げられていない。『本院侍従集』については跋文を引用するのみである。

(24) 鈴木あき子(注9に同じ)は「この歌集を史実についての予備知識なしに一読すると、ある年の夏から秋にかけての短い間に起きた出来事という印象を受ける」と言う。確かにそういう印象は受ける。さらに鈴木は史実上の兼通らの経歴を閲して「実は天慶五年から天曆二年にかけての約七年間に亘る出来事である」と指摘する。伊尹や兼家をみても叙爵前から兵衛佐まで六年程はかかっている。兼通も同様であろうとの予測は経歴を閲するまでもなくたつである。つまり、経年について、序文・跋文の記述と歌の配列から受ける印象は齟齬するのである。実際には七年程にも亘つたことをわざと短期間であったように配列したのであるのなら、跋文で兵衛佐就任に触れるのはなぜなのだろうか。本稿では配列の間

題は取り上げないので、今述べた視点からの問題追究も保留とする。実は長期間に亘ることを短期間であったかのように編集してある点については、稲賀敬二の論文も参照。

- (25) 荻窪昭子は注15での引用に続けて、「そしてそのすぐあとに「ほりかはの中納言とかや」という跋が置かれているので、悲恋に懊悩した揚句、命を縮めることもなく、中納言に出世していることがわかる。それだけにむしろ今の中納言の若き日の恋愛失敗譚と受け取られ、下手をすると笑話になりかねない。」という見方を示す。
- (26) 神作光一・長谷川哲夫、二〇〇三年九月・風間書房。
- (27) 『本院侍従集』注釈(一)、『東京学芸大学紀要人文科学』37・一九八六年二月)。以下、「伊藤注釈」と略称する。底本は異本系の宮内庁書陵部蔵本(五〇一・一九七)。
- (28) 私見によっても、兼通歌の特に上句は、『古今和歌集』卷十一・恋一・503番の「題しらず 読人しらず」歌「おもふには忍ぶる事ぞまけにける色にはいでじとおもひしものを」を踏まえている可能性があると思う。この歌も「伊藤注釈」で「色に出づ」の用例に挙げられており、どちらかというところ「危惧」を詠み込んだ歌になると思う。
- (29) 田中初夫、一九五六年一〇月・龍門山房。
- (30) 西下経一・滝沢貞夫、二〇〇七年十一月・笠間書院。
- (31) 『冷泉家時雨亭叢書古来風躰抄』(一九九二年一二月・朝日新聞社)による。
- (32) 稲賀敬二は古今歌と対比して「少くとも……親切に訪問のめじるしを教えたりする女性ではない」と言う。
- (33) 久保田淳、二〇一二年一月・角川学芸出版。
- (34) 目加田さくを・中嶋真理子、一九九一年七月・風間書房。以下、『全釈』と略称する。底本は流布本系の松平文庫本。
- (35) 『多武峯少将物語校本と注解』(一九九一年二月・桜楓社)。
- (36) 犬養廉、一九九四年一二月・岩波書店。
- 卷十一・恋一・503番の「題しらず 読人しらず」歌「お

(37) 「本院侍従歌」(『國學院雜誌』40卷4号・一九三四年四月)。

(38) この後書は異本系には欠けている。

(39) 6〜8番については、『新注』が出るより前、庄司敏子『本院侍従集』の贈答歌一六・七・八番歌の解釈を中心にして(『平安朝文学研究』17・二〇〇九年三月)

が、冷泉家時雨亭文庫本を軸にして詳細に検討している。

本稿で特に参考になったところを挙げておく。『実方集』248番の例を、「まだ共寝をするまでの仲ではない男女」と指摘している。焼石について、「恋故の胸の痛み」などという稲賀敬二の見解や、「男のあまりに一途なさま

に恐れを抱いてしまった」という「伊藤注釈」の見解を否定しながら、「男との仲が世間で噂になつては困る」という思いからの仮病であった」と解している。(庄司

は冷泉家時雨亭文庫本「人ことむつまじう」を「人言むつかしう」と整理している)。「専菜の」についても詳細に検討の上、「流布本本文では文脈がうまくつながら

なくなつてしまふ」とする。全体的にこの場面からは「女に振り回される男」の姿を見て取っている。ただし、『一条撰政御集』31番以下を引用して、兼通と同様に伊尹も

「本院侍従にうまくあしらわれている」とみるところは、私論と見解を異にする。

(40) 「夏の夜」の受け止め方も含めて、「伊藤注釈」も参照。

(41) 22番の本院侍従歌の初二句「ほす人もありとこそさきけ」などから、兼通に他の女ができたこと、特に元長親王女との結婚が読み取れるとの説が稲賀敬二や『全釈』などにある。しかしそんなことは詞書には一切表れない。

(42) 「覚え」は「世の覚え」(人望)とも「帝の覚え」ともとれそうだが、後者でとるのは集全体的内容に照らして違和感があるので、前者でとっておく。ちなみに、『全釈』『新注』は前者で、『女流文学叢書第一編』(注7参照)『注考伊勢集及本院侍従集』(注29参照)「伊藤注釈」は後者でとっている。

(43) 28番以下の終盤部分における兼通の姿について、旧稿

では若書きであったせいもあり用語を充分吟味しないまま「慰められたりからかわれたりしている」とか「男の惨めな姿」とか色々書いた。それにしてもここで兼通をどのように描こうとしたのかという編者の意図を正確に現代語で言い当てるのは困難だ。今はとにかく、兼通を冴えない人物として描こうとしているとは言えると考えられるのである。本院侍従やその友達から同情されたり慰められたり、御達には宥められたり、いずれにしても、兼通を冴えないように描いているものと考ええる。それは、序盤部分における兼通の描かれた方にも通じて言えることであつた。

(44) 注3参照。なお、この発表は本稿の締め切りの半月程前に行われたので、その内容を本稿で検討することはできなかつた。

(45) 『蜻蛉日記』下巻の政治的性格―伊尹・兼通・遠度の記事を中心に―(『平安朝文学研究』16・二〇〇八

年三月)。

(46) 『大鏡の人びと』(一九八七年・中央公論社)。

(47) 『日本古典文学史の課題と方法―漢詩 和歌 物語から

説話 唱道へ―』(二〇〇四年三月・和泉書院) 所収。

後、注1拙著に改稿の上収めた。